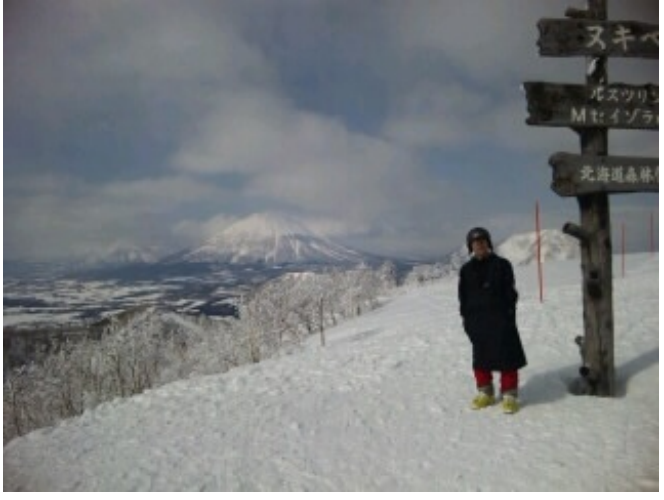

道南サイクリング(1)

第３回北海道サイクリング　　１９９１年８月初旬　道南

同行者

会社の技術部の川上部長と走るのは初めてだった。彼はNIFTY-Serveにおいて「ジャック・アマノ」というhandle（ニックネーム）で通信しているので、以降「ジャック」と呼ばせてもらおう。ジャックはよく走った。少年時代よりサッカーやラグビーで鍛えた足は今もペダルの上から大地に力強いキックの雨を降らせる。彼にとって今回の旅行は最初の北海道サイクリングツアーであり最初のキャンピングツアーでもあった。二つのご馳走を同時にほおばった彼は、自らが言うようにこれらにやみつきになってしまうことだろう。これらは互いをさらにおいしくする相乗効果のあるご馳走なのだ。なぜなら、日本で北海道ほど自転車でのキャンピングツアーの醍醐味を満喫させてくれる土地はないし、冬を除くと自転車でのキャンピングツアーほど北海道旅行を豪華にしてくれる旅の方法はない。

ぼくらの走行力はほぼ互角だった。ジャックと抜きつ抜かれつしながら走っているといつしかぼくらは一体になる。ぼくらはもう二人の別個のサイクリストではなく、まるでのっしのっしと大股で歩む目に見えない巨人の両足となったかのように互いに前後しながら確実に前進する。こうしてジャックと越えた峠はどれもひとりでなら到底考えられないような気軽さでクリアすることができた。

しかしぼくらは二人だけではない。二人きりで走ったのは全行程の四分の一足らずだ。第三の男はロードレーサーで参加の特許部同僚の刀根（とね）君だ。彼はさまざまの理由でぼくらと別行動をとることが多かった。彼は春にニュージーランドをひとりで走った独身貴族ラナーで、今回の北海道旅行を強く望んだのも彼だった。彼とは３年前の夏にも一緒に北海道を走り、それ以来彼も北海道マニアになった。あの時の彼はまったくの初心者だったが、羅臼から知床峠を一気に登り切ってぼくを驚かせた剛脚の持ち主だ。しかしそんな彼も今回の道南の山岳中心のツアーにおいてはギア比のハンディもあってか、マウンテンバイク系のぼくらに比べ自転車を押して登る姿が目立った。彼はほとんどの荷物を詰め込んだザックを肩に掛けて走ったので、常に重荷を背負っての苦難の旅路となった。長距離のツアーの時は荷物はできるだけ自転車に直接装着したほうが賢明だ。

出発

８月９日、ぼくがすべての準備が整ったと思ってやっと寝床に着いたのはもう２時近かった。子供の頃からそうだが、こんな時には期待に胸を膨らませ、地図等を見ながらあれやこれや考えているうちに時間があっという間に過ぎてしまうのだ。これから行こうとする旅を空想しながら計画や準備をする時の喜びは、その旅行を遂行している時に身体でじかに味わう喜びに勝るとも劣らないものだし、その後に続く記憶の糸をたぐりながらの黄金の回想の喜びにも匹敵しかねないほどのものだ。

しかしいつまでも空想の喜びに浸っていてはならない。旅の準備が不完全になるのはたいていこの空想のために気もそぞろになるからだ。チェックリストを見てはその中に書かれた用具の一つ一つからまた空想がわきたち、時計を見てはあすのこの時間には洞爺湖の畔でテントの中から星をながめているだろう自分を空想し、時間の過ぎるのも、チェックリストで用具を確認するのも忘れてしまう。こうしてぼくはシュラフを忘れ、刀根君はテントを張るためのポールを忘れ、さすがのジャックも盛岡から函館までの特急券をＬ特急券として買うべきことを忘れてしまった。

ぼくは２時少し前にやっと眠りについた。４時半に起床の予定だからもう２時間余りしか眠れない。この２時間余りの睡眠の後は当分のあいだ布団の上で眠れないのだ。朝には上野を７時少し前に出るひかりに乗らねばならない。（航空券がとれなかったので初めて鉄道で北海道に行くことになった。）ぼくは新三郷からだから当然大宮から東北新幹線に乗るのが賢明であるが、上野で満員になった場合に大宮から自転車を持って乗り込めない事態が危惧された。したがって念のために始発駅の上野にまで行くことにしていた。結局は思いのほかすいていたので大宮から乗ったとしても難なく乗れ、席に座ることもできるくらいだった。

ジャックは足立の自宅から自転車で上野駅まで直行した。それがいつもの彼のやり方だ。道がすいていたので３０分くらいで到着できたそうで、予想より早く着き過ぎてしまい時間をもてあましたという。ぼくはいつも禁煙車両に乗るので後寄りの自由席車両に入り、ジャックは中寄りの喫煙自由席車両に席をとった。後者はがら空きだったのでしばらくしてぼくはジャックの所に移りそこで彼と雑談をして過ごした。話題はこのひかりで上野を早朝出発することを計画した張本人の刀根君が姿を見せなかったことだ。

ジャック「彼、来なかったね」

ぼく「ええ」

ジャック「どうしたんだろう？」

ぼく「まだ寝てるんでしょう」

ジャック「どうするつもりだろう」

ぼく「彼は浦和ですから、大宮から乗ってくるでしょう」

ジャック「朝食は食べた？」

ぼく「いえ」

ジャック「おれもだ。腹へったね」

ぼく「ええ、弁当でも買って食べましょうか」

ジャック「その弁当いくら？」

通行人「千円です」

ぼく「高いですね、朝食としては」

ジャック「うん、幕の内か。ほかはないの」

通行人「これだけなんです、すいません」

ジャック「じゃあそれでいいや」

ぼく「二つ下さい」

ジャック「おや、大宮に着いたね」

ぼく「着きましたね」

ジャック「刀根君いないね」

ぼく「いませんね」

ジャック「どうしたんだろう」

ぼく「まだ寝てるんでしょう」

ジャック「どうするんだろう」

ぼく「まあ、先は長いですからどこかで追いついてくるでしょう」

ジャック「そうだね」

ぼく「少し前に川島君と走ったそうですね」

ジャック「走った。ダート道をたいへんだった」

ぼく「彼はダートが好きなんですよ」

ジャック「登りではずいぶん差をつけられたよ」

ぼく「そうですか、まだ彼の足は健在でしたか。確か今一人で東北を走っている最中ですよ」

ジャック「うんそうだ、NIFTY-Serve でそんなことを知らせていたな」

ぼくは弁当を食べ終わると浅い眠りに落ちていった。その浅い眠りの中で、今度の旅の漠然とした計画を練り始めていた。それは刀根君が結局参加しないことになった場合を想定したものだ。しかしすぐに深い眠りに落ちていった。

レンパン島

「アナグマ先生南洋従軍記」。ぼくは今この旅行記の作成と並行して前記の本を読んでいる。従って、その影響を受ける状態にある。その本は北海道旅行後ジャックからプレゼントされたもので、アナグマ先生とはジャックの今は亡きご尊父のことである。彼は高校で生物の先生をしていた頃生徒から「アナグマ先生」というあだ名で慕われた。この従軍記の正題は、「生物教師川上弘見の戦史　マレー半島の５年間」というもので、最後の部分には戦地で詠まれた数々の短歌が収録されている。この書はだれの目にも触れることなく書き進められ秘蔵されていたものだが、著者の通夜の式のあと原稿が発見された。四百字詰め原稿用紙で４００枚近くあったという。

今回の北海道旅行の折々で、ジャックのとった個性的行為のいくつかはその原型をアナグマ先生従軍記に見つけることができる。まず今回のぼくらの旅の計画を出発のほんの数日前に聞かされたにもかかわらず、間一髪入れずに参加の意を表明した決断の速さがある。またジャックは植物や動物に詳しく、歩きながら通り過ぎるすべての草木と動物に興味を示した。彼にとって自分がその名を知らない動植物に遭遇しそのまま正体を見極めることなく通り過ぎることは、ちょうど数学者が解けない問題をそのままにして次の問題に移るのと同じくらい強く後ろ髪を引かれる思いがするのであろう。アナグマ先生は日本を遠く離れたマレーシアの熱帯雨林の中にあっても知らない動植物がほとんどないくらいの博識者だった。今から思えば、北海道にしかいないというエゾゼミの発見とその観察、路上でひかれて多く死んでいた小動物はネズミでなくモグラの子供だとの主張（あとで北海道にはモグラはいないということがわかった）、珍しいものは何でも食ってみる食道楽ぶり、さらには禁断症状を伴うようになってしまった愛煙ぶり、そして余市から長万部までの輪行時にディーゼルカーの窓際で外の景色をくいいるように眺めるジャックの姿、これらは従軍記のアナグマ先生を彷彿とさせる。（注：輪行とは自転車を分解して袋に詰め電車等に乗ること）。しかしぼくが少々心配なのは、おそらくアナグマ先生をも越えているのではなかろうかと思われるほどのジャックの驚くべき酒豪ぶりだ。アナグマ先生はたしかに痛快に酒を飲んだ。しかしそれはあすの命も知れない戦地でのことだ。ジャックよ、自分が今置かれている究極の境遇を夜な夜な忘れてしまいたいと欲する人のとった行為をそのまま自分の規範にするのは危険ではないか。

さて盛岡までの車中でジャックは先年行ったマレーシアのレンパン島の話をしてくれた。この島は終戦時に日本兵捕虜が収容された所で、アナグマ先生もここで俘虜生活をした。従軍記によると「赤道直下のサンゴ礁の島で、食うものは何もない」らしく、「雨が降ると有機質はみな洗い流されて、珊瑚砂だけが残るような土地で」、「第一次大戦の時にドイツ軍の捕虜が収容されて、みんな死んじまった」という所であった。アナグマ先生従軍記の終章はこの島を舞台にしていた。日本へ帰れるのはいつのことかとの希望も虚しくここで病気等で亡くなった人たちもいた。去年、政府機関の主宰でレンパン島帰還者及び関係者によるレンパン島ツアーが組まれ、ジャックは新聞でそのツアーの募集記事を見つけるやいなや会社に休暇届けを出し、ご尊父の足跡をたどるためこのツアーに参加したのであった。

ジャックはアナグマ先生の従軍記とその他の記録を頼りにレンパン島でアナグマ先生が活動したらしい所を巡った。するとある遺族が彼と同行した。彼とほぼ同年輩の男性とその妻と娘二人から成る家族だった。その男性の父がアナグマ先生と同じ班に属していたらしかった。彼らはボートに乗って川を上り、ボートがもう進めないくらいの所まで来ると、潅木を切り倒しながらジャングルの中を歩いて進んでいった。そしてその男性は自分の父が亡くなったらしいと思われる場所を見極めると、家族に手伝わせてそこに墓碑を立てた。ジャックも手伝った。そしてみんなで冥福を祈った。ジャックはここで深く感激してもらい泣きした。なぜジャック・アマノがこの時人前で涙したか、彼を知る読者に理解してもらうためにはそこまで来る間にこの男性がジャックに話したこれまでの経緯を語らねばなるまい。

この男性を仮に吉田達夫と呼んでおこう。達夫は吉田家の長男である。母は約１年前に老衰で死去し、父はもっと以前に亡くなっていた。彼の母はいよいよ自分の最期が近づいたことを悟ったとき、達夫だけを枕元に呼び寄せ、それまでだれにも言わなかった彼の出生の秘密を打ち明けた。「達夫よ、あんたに今まで隠しとったことがあるんじゃが。実はの、お父さんはあんたの本当のお父さんじゃあないんよ。あんたの本当のお父さんはあんたがまだこんまい頃にマレーシアのレンパン島ゆう所で病気で亡くなりんさったんじゃ。この封筒にあのお方の死亡を通知する書類と遺品が入っとるよ。加藤義郎（仮称）というのがあの人の名前じゃった。写真はここにはないが、久留米（仮）に弟さん、あんたには伯父さんになる人がいなさるからそこに行ったら見せてくれるはずじゃ。お母さんはあんたの本当のお父さんと出征の三日前に結婚したんじゃ。でもその出征がお別れになった。二度と会えなんだ。手紙や葉書がたくさん届いとったが、それらもみな弟さんに預けてあるけ、訪ねていってもらいなさい。いくつかはあんたが生まれたことを知って喜んで書いたもんで、あんたの名前を達夫と名づけたことも手紙のどれかにちゃんと書いてある。戦争が終ると、あんたのお父さんはたくさんの人と一緒にレンパン島に移されて捕虜生活をしたゆうんじゃ。私（わし）は毎日少しずつ大きくなるあんたを見ながら、お父さんが帰ってくるのを首を長ごうして待っとった。あの頃は高かったけど写真機を買ってあんたの写真を撮って、何回かレンパン島のお父さんに送ってやっとったんじゃ。ところがあんたが最初の誕生日を迎える数日前に、突然、お父さんが病死しましたゆう通知がきたんじゃ。あとで訪ねて来た戦友だったという人の話じゃあ、捕虜になった時に炎天下を数日間むりやり行進させられ、体が衰弱してしもうて、レンパン島じゃあほとんど横になったままの状態で、日本に帰れるという望みだけで命をつないどったそうな。だからお母さんが送ったあんたの写真を一日中ながめよったそうじゃ。しかし栄養不足と熱帯の暑さのせいで身体は回復するよりも悪くなるいっぽうで、とうとう最期の数日間は写真を持つ力もなくなり、戦友が目元に持っていってやらにゃあならなかったそうじゃ。写真見て笑いながら死んだんじゃそうな。亡くなるときの私宛ての遺言は、あんたがまだ物心のつかないうちに、いい人がいたらすぐに再婚するようにということじゃった。いい人じゃったがのう。かわいそうにの。」

これを聞かされた吉田達夫氏は、この一年間、本当の父親のことをもっとよく知るために奔走した。そ

してついにレンパン島に家族を連れて来て、母や自分の待つ日本に帰ることなく無念の死を遂げた実父の霊を慰めるために、ジャングルの中に自らの手で墓標を建てた。その姿に心を打たれない人があろうか。ジャックも手を合わせた。

洞爺湖

盛岡でぼくらは東北新幹線から在来線に乗り換えた。ここで多少時間があったので、ぼくは磯部の刀根家へ電話した。あらかじめ刀根君と打ち合せがあり、誰かがはぐれたときには刀根家の電話を相互連絡のために利用することになっていた。お母さんが出られ、その説明によると、刀根君から電話連絡が入っており、彼は案の定寝過ごしたということであった。しかし彼にとって好運なことに、千歳行きの航空券を確保することができたのだ。これにより彼は、ぼくらより一足先に北海道入りすることになり、洞爺駅でぼくらを迎えることとなる。

ぼくらは東北新幹線のターミナル盛岡までは座ってゆけたが、そこから乗った函館行きの特急列車と、さらに乗り換えて洞爺まで乗った特急列車はいずれも満員で、後者は辛うじて自転車を持ち込めるほどの込みようで、結局盛岡から洞爺まで立ちっぱなしを強いられた。このことをあとで知った刀根君は心の中では「飛行機できて良かった」と喜んだろうが、それは同時に他人の不幸をも喜ぶことにもなるので、複雑な顔を造っていた。自転車を組み立てたのち記念撮影をし、駅のスーパーマーケットで食料品を買い、出発した。

最初の野営地洞爺湖では、キャンプ場の端っこの小さな岬のつけねとなったわずかな幅の砂地にテントを張った。湖は水の満ち引きがないので、朝起きたら水に浸かっていたということもあるまい。ぼくは自分の自転車を岬の薮の中に置いたので、自転車は２台しか見えない状態だった。他の二人が水くみ等に出かけていないあいだに、キャンプ場の人がキャンプ場使用代の集金に来たので、二人だと言って、８００円だけ払った。こういうこすいことをするのは良くないことだが、なにしろぼくらはキャンピングカーで来る人たちに比べ、場所はとらないし、大した料理をするわけでもなくゴミもあまり出さないし、水道の使用もわずかだ。それなのに彼らと一緒の代金とは不公平である。

近くの公営温泉に行った。入ろうとするともうあと３０分しかありませんよ、と番台の男性が心配げに言った。３０分あれば十分だった。このへんの人はずいぶん時間をかけないと風呂に入った気がしな

いのだろうか。そうだ北海道は、とくに冬は冷凍庫の中にいるようなものなのだ。だから風呂では最初の１０分で解凍し、次の１０分で温まり、最後の１０分でようやくうまいぐあいにゆであがるわけだ。

洞爺湖の夜は冷えた。湖の向こう側からしきりに花火が打ち上げられる。隣にテントを張った中国語を話す若い連中は、寒くないのか浅瀬に入ってゆき長らく何かをすくっていた。ぼくらはまずビールで乾杯したあと、夕食としてインスタントラーメンを作りハムやベーコンを炒めて食べた。やがてジャックのアルコール度の高いバーボンウイスキーがふるまわれ、ぼくらはすっかりいい気持ちになった。食事が終わると水際に席を移し、湖面を見ながらウイスキーをちびちびやる。星のよく見える夜空に花火の残煙か、昭和新山や有珠山から吐き出された煙か、薄い雲状のものが低く漂っていた。湖面には霧が広がり始めていた。歌人ならここらで歌の一つも詠んでみたくなるところだろう。とつぜん隣でシャーという油炒めの音がしてき、すぐにいい匂いがたちこめた。振り返って見ると、くだんの中国人たちが浅瀬で捕ったばかりのものをフライパンで炒め始めたのだ。ぼくはなぜかおかしくなってきて「ハハハ」と笑った。すると彼らも「ハハハ」と笑い、ふたことみこと何か言ったがその言葉のなかに「川エビ」というのが聞き取れた。ではアナグマ先生にならっておくればせながらぼくも今ひとつ歌を作ってみよう。

　　音立ててフライパンを跳ねる川エビやうまそ　ひとつこっちへも跳ねてこい

だめだ！

ぼくはここで初めてシュラフを忘れていることに気づいたが、あわてなかった。シュラフカバーがあったし、長期の旅の時に必ず持参する愛用のダウンジャケットもあった。これらの組合せはシュラフと同様の断熱効果があった。問題は刀根君のほうだった。テントポールを忘れてしまっていたのでテントを張ることはできそうになかった。それで、ジャックのテントの入り口のポールを借りることになった。それでも彼のテントはほぼペチャンコの状態で大型の寝袋といったところだった。狭所恐怖症の彼にとってはつらい旅になりそうだ。

翌朝、ぼくらは早く起き、紅茶を作り簡単な朝食を用意して食べた。出発する前の点検で刀根君の自転車の前輪のスポークが２・３本はずれているのが発見された。くっつけることが不可能とわかったのでぼくはそれらを取り除いてやった。走るとやはりタイヤが揺れる。こんな状態では下り坂を猛スピード

で下りるのは怖い。彼のロードレーサーもいよいよ引退の時が来たようだ。

水筒を水で充たすと、まだ寝ている人たちのテントの間を縫って進みキャンプ場をあとにした。朝のランは静かで気持ちいい。聞こえるのは早起き鳥や虫の声だけだ。そのまま洞爺湖を反時計回りに一周。約１時間くらいかかったろうか。途中、煙を昇らせる有珠山と昭和新山が右手に見える。ぼくは軽い朝食だけで出発したので、途中で腹が減り、スピードが落ちてきた。刀根君とジャックはどんどん先に進む。平地を走るときはたいていこの順だった。タイヤの路面抵抗の小さい順に順位が決まる。逆に坂道を上るときは、ギヤを最も軽くできるぼくが彼らを追い抜くことが多かった。そしてジャックは速度計を見つつ自分で決めたペースを守りいつもゆとりを残しておくような走りをしていた。

さて空腹のために足に力の入らなくなってきていたぼくは、無人のくだもの直売所で自転車を止め、プラムが６つ入ったパックを買って全部しゃぶった。ふつう北海道の果物屋はサイクリストと見ると激励してくれ多めに包んでくれ、おまけにほかの物までも入れてくれるが、無人の直売所は至極公平だ。６個のプラムがあっといまに平らげられ、ぼくは元気を回復した。次の直売所でジャックと刀根君がやはりプラムを食べていた。ぼくにも残しておいてくれたが、プラムはもういらないのだった。ぼくは桃を一パック買ってまた平らげた。湖を一周して元の所に戻る頃にはまた腹が減ってきたので食堂に入ってちゃんとした朝食をとった。また、オロフレ峠越えに備えて携帯食糧も仕入れた。

登別温泉

洞爺湖を後にしオロフレ峠を越えて登別温泉に向かう。今回の行程のうちぼくにとってはこの峠が一番きつかった。途中ヒツジのいる所で休憩。昼寝をする。早朝に出発した場合には昼寝は必要だ。三人は３！通りの順列を駆使しながらついにオロフレ峠にたどり着いた。峠からしばらくの寄り道をするなら展望のより素晴らしい所に出れるらしいが、ぼくらはもう寄り道をする体力的余裕はなかった。特に峠の場合、地図の上でなら、ここに着いたらこの横道に入ってこの滝を見に行ってみようじゃないかなどと余裕のある計画を立てることが多いが、実際に自転車をこいでその峠に着いた時には、そこにたどり着くのがもうせいいっぱいで、あとは下り道にしかハンドルを向けたくなくなる。オロフレ峠は標高のせいで涼しく（１２３０.８ｍ）、ここからの下りでさらに空冷されるので、ぼくはダウンのジャケットを着、長ズボンのレインウエアをはいた。スピードにのって下っていると、レッヅのプラスチック赤ヘルが風を受けて何度か飛びそうになる。途中、カルルス温泉で一休みした。ここは湯質が、ゲーテ、ベートーヴェン、マルクスなどが療養したチェコスロバキアのカルロビバリ温泉と似ているということでこういう名が付けられた。ちなみに次に訪れる登別温泉の名の由来は、アイヌ語の湯のいづる山「ヌ

プリペツ」からきている。

登別温泉に着くと、まず地獄谷見物をすることにした。しかしぼくはもう体力を使い果していたので、景色の見渡せる適当な所に座ると、キャラメルとかをクチュクチュやりながらじっとして煙の上がる風景を眺めて、体力の回復してくるのを待った。幸いあとでここを野営地とすることになったので、この場所の見物はその時ゆっくりできることになった。可愛いキタキツネが現われて観光客の人気のまとになっていた。このモデルはまだ子供のようであった。ぼくも写真を一緒に撮ってもらった。

地獄谷の入り口で大きなクマの剥製を乗せた軽トラックが停まっていた。見るとそのクマは首や手が周期的に一定の動作を繰り返しており、これらを組合せるとどうやら愛嬌よくおいでおいでをしているらしかった。そこで近づいていってさわってみると、毛皮は本物だった。すると車の陰からおじさんが現われ、パンフレットをくれ、今から行くとクマのショウが見られますよと誘った。その軽トラックは近くのクマ牧場の宣伝カーだったのだ。クマのショウならおもしろいかもしれない。しかしぼくらは腹が減っており、もうあまり動きたくなかった。そこで、明朝見に行くことにすると言うと、彼はあすは雨になるらしいよ、と気になることを言った。雨が降るとクマがなかなかゆうことを聞かなくなり、調教師をけがさせることがあるのでショウは中止になるかもしれないということだった。あとでパンフレットを見ると、その中の写真にそのおじさんが写っていた。翌朝クマ牧場に行きクマたちを見ていると、例のおじさんがホースの先をクマたちに向け水浴びをさせていた。そして次に彼を見たのは、ひとだかりに誘われて見にいった若クマのショウでだ。なんと彼は調教師だったのだ。クマ牧場ではたくさんのクマを見たが、一番印象に残ったのは、あのおじさんだ。彼がショウでクマの歩き方を真似て揺れながら小走りに歩く滑稽な姿は当分忘れられまい。クマのショウも彼のワンマンショウの一幕だったのだ。

さてぼくらはビールをおいしくするために、まず登別温泉の公衆温泉浴場に入った。古い趣のある浴場で、３００円は安かった。湯質は明礬と硫化水素の二種があった。しかし湯が熱くてのんびりつかっているわけにはいかなかった。とくに明礬のほうはやけどしそうだった。床が木だったのでぼくはつるりと滑り、危なく頭を打つところだった。もしこの地の呼び名を登別温泉でなく、昔ながらのヌプリペツ温泉のままにしておいてくれたなら、ぼくはもっと足元に気をつけていたろうに。

湯から出ると、有名なラーメン屋へ行き、ビールで乾杯した。ラーメンも食べた。しかし日が暮れる前に野営地を決めねばならないのでのんびりしていられない。ラーメン屋を出ると、自転車を押して歩きながら適当な所を探した。最終的にはくだんのクマおじさんからアドバイスのあった、地獄谷の中にあ

る公園のような広場にテントを張った。ここは下が草地で心地よかった。

刀根君は前にも述べたように、テントは持ってきたがポールを忘れてしまっていた。彼のテントはぼくのと同じアルペンライトで組み立てるとイルカのような形になる。しかし折り畳み可能な一本のポールが必要で、これを馬蹄形に曲げて骨格とする。したがってこのポールを忘れた刀根君はりっぱなテントを張ることができなかった。木から落ちて地面に転がった蓑虫のように、彼は寝袋とつぶれたテントの中で眠らねばならなかった。洞爺湖では何事もなかった。しかしこのことで登別温泉の地獄谷に野営したときに不都合が生じた。ぼくらが食事をしていると、キタキツネが寄ってきたので、薩摩揚げとかイカの乾したのを細切れにして与えた。これが良くなかったものと思われる。ぼくらがテントに退いた後もこのキタキツネは去らず、もっと食物はないものかとぼくらの荷物を漁ったらしい。ぼくの運動靴は二足ともあらぬ所に持っていかれており（さすがに臭かったのか、たいして噛み裂かれてはいなかった）、食器セットを包む袋はひもが抜き取られ、布地はずたずたに裂かれていた。ジャックもいろんな物をいたずらされて使いものにならなくなっていた。しかしもっともかわいそうだったのは、くだんの蓑虫テントで寝た刀根君だ。暑いので、入り口は蚊よけのネットだけをちゃんとチャックしていたのだが、キタキツネは、食べ物でも入っていると思ったのだろうか、刀根君の顔に接近してきて、ネット越しになめてみようとするのだった。そこで異様な気配を感じた刀根君は、目を開くとキツネと目が合い、「コラッ」と叫ぶこと三・四度であった。

ところでぼくらがこの人里離れた場所で野営するにあたりひとつ恐れたことがある。それはクマだ。襲われた時、いつでも逃げられるようにぼくとジャックは自転車にチェインキーを掛けないでおいた。もしクマが出てきたとして最初に手をつけるのは最も食いつきやすいように横たわる蓑虫テントの刀根君であろうと思われた。そこで刀根君がキャー！と悲鳴を上げたらいつでもテントから飛び出し、自転車で坂を一目散に下って逃げ、その後地元の人に助けを求め刀根君を救いに戻ってくる、という段取りだった。それで刀根君が「コラッ」と叫ぶたびに、ぼくはクマかと思って飛び出そうとしたが、どうやら刀根君に叱られたのはくだんのキタキツネのようだったのでなあんだと思い、三度めからはもうあわてないようになり、そのうち眠ってしまった。

この災難に懲りて刀根君は細い竹を二本切りこれらをポール代わりにしてなんとか立体的にテントを張ることができるようになった。

翌朝、いつものように４時半くらいに目を覚ます。軽い雨がテントを打っている。外に出る気にはならない。しばらく思案したのちまた眠った。次に目が覚めたのは６時近かった。テントの中で横になった

まま、クマ伯父さんにもらったパンフレットを見ていると、このあたりの地図があり、この地獄谷の奥に小沼湯という露天風呂のようなものがあるらしかった。ぼくらはそこへ朝風呂を得に行ってみることにした。途中、道脇の地肌から煙の上がっているところがあった。キュルルと啼くキタキツネもまたいた。目的地に来てみると地図の上では露天風呂のようだったものは熱過ぎる湯のあふれる浅い湯源池だった。とてもはいれそうにない。登別は温泉立地の町だから、羅臼の「熊の湯」のようなだれでも無料で入れる露天風呂は設けないのだろう。ジャックは今回の旅で、露天風呂に入ることを特に楽しみにしていたがお預けになった。

野営場所に戻り朝食の用意をしたり出発のための整理をしたが、それはくだんのキタキツネのいたずらの一つ一つを発見していくことになった。とにかく動かせるものはどれも動かしており、噛みちぎれるものはどれもちぎっているのである。可愛いものには注意せよということであろうか。気を許してはいけない。生卵が３つ余ったので温泉卵を作ることにして地獄谷へ降りて行き鍋に卵を入れ湯にしばらくつけておいた。しかし十分熱くならず、とろりとしたのができた。

幸いその朝はたまに小雨が降る程度で、クマ牧場で数時間過ごしたのちは雨も上がり、好都合だった。クマ牧場へはロープウェイのゴンドラを１０分くらい乗って登って行く。クマ牧場の展望台からは神秘の湖、クッタラ湖のまん丸い姿が間近に見られるはずだったが、霧のため見えなかったのは残念だ。もし見えていたらあとで朝散歩で行った小湯沼のそばにあった大湯沼をクッタラ湖とまちがえることもなかったろう。

クマ牧場は一見の価値があった。クマの物凄さをまのあたりに見て、ぼくらは感動した。ぼくはよく山道を自転車で走るので、クマに出合ったときの方策を今までにいろいろ考えていた。まず一番いいのはクマが坂の上の方から現われたときだ。このときはすぐに向きを変え坂を下って逃げれば、いくら足の速いクマも追いついてはこれまい。次に、あいにく坂の下の方からクマが現われた場合だ。この時は道が十分広ければ、十分なスピードを上げてクマの横をすり抜けて坂を一目散に下って行くことにする。しかし道が狭ければ、ぼくは自転車を降り、静かに歩いて坂を上る。ここであわてて走ってはいけない。クマは子供の時から、親のしつけが悪いのか、すばやく動くものを見るとつい追いかけて殴ってみたくなる悪い習癖を持っているものだ。クマに出合ったら死んだふりをするといいというのはこのためだ。だから重い荷物を載せた自転車に乗って登り坂をこいで行くとクマに追われ追いつかれる危険性が大きい。そこでぼくは静かに歩いて坂を上るわけだ。ここでクマにこちらが恐がって逃げているのだ、と思われてはいけない。「なあんだクマ公じゃないか、用はないや」というふうにつまらなさそうにして歩かねばならない。つまり、やあさんに出合った時にとるしらんふりの身のこなし方だ。ところがそれでもこちらに因縁をつけたがるクマだったら、仕方がない、どの動物にもできない人間だけが身につけた秘技を披露してやるといい。適当なサイズの石を拾って、頭を狙って勢いよく投げつけるのだ。あま

り外してばかりいると、やっこさんも近づいてきて遠慮なくパンチを見舞おうとする。ここでこちらが斧を持っていればこれで対抗することも考えられる。落ち着いて眉間をねらって一発見舞ってやればしとめられよう。たくさんの荷物を搭載したマウンテンバイクでクマに体当たりするのはどうかという考えもある。スピードに乗っていれば打撃は大きいだろう。衝突のショックはクマの柔らかい体が吸収してくれるだろうからこちらは無傷ですむ。「サイクリスト　マウンテンバイクで体当たり　人食いクマを倒す」という見出しが新聞に載れば一躍スターサイクリストだ。

しかし、ぼくはクマ牧場に来て、今まで考案していたクマ対策があまりにも楽天的過ぎたことを自覚した。ただ坂を下って逃げるというのだけは現実的で有効だろう。しかし石を投げるのはだめだ。クマ牧場のクマたちは小石状のクマフードをキャッチャーミットのようにでかい両手でうまく受けてしまう。あるいは口でもぱくっとうまくキャッチする。石だから歯が一二本折れるくらいのことだろう。次に、いくらこちらが斧を持って立ちむかっていってもクマが立ち上がると、到底斧は眉間に届かず、こちらはあの爪付きミットで一撃を受けるだけだ。また自転車での体当たりは子熊ならいいかもしれないが、親ならドッヂボールが飛んできた程度のものだろう。軽く受け止められて、このやろうとぶんなぐれてしまう。

クマ牧場では「ユーカラの里」というアイヌ村のレプリカがあり、アイヌの伝統を保存する古い建物が展示されており、その中には民芸品もあり、古くから伝わるクマ祭りの実演も披露された。アイヌの踊りは素朴だった。鳥の鳴声を真似て舌を震わせて「トゥルルルルル」と声を出すのが印象的だった。刀根君とはこのアイヌ村ではぐれてしまいまた別行動をとることになった。

ゴンドラで下りて行くと、刀根君が広場のベンチで何かを食べながら待っている姿が窓から見えた。ぼくはクマ牧場のゴンドラ駅で背に牙を剥く黄色の熊の絵とその上にやはり黄色で「熊出没注意」とかかれたデザインの黒いＴシャツを買った。

クマ牧場をあとにして、食料を購入したのち登別温泉を出発し、クッタラ湖を目指した。クッタラ湖は神秘の湖という意味である。途中ひと登りすると眼下に壮大な凹地が現われ丸い大きな湯の池があった。地図を見てこれがクッタラ湖かと思った。しかしそれは朝散歩に行った小湯沼のそばにある大湯沼であった。神秘の湖が浮世の温泉町からそう簡単に到達できるはずがない。

さらに走って、曇り空の下で見た神秘の湖、クッタラ湖は哀愁を帯びていた。しかしぼくらは長らく感傷に耽っているには腹が減り過ぎていた。すぐに水辺に行って、ピクニックシートを敷き、そうめんを作るために湯がわかされた。また、その湯でじゃがいもとネマガリ竹の子を煮た。これでは足りないと、残っていた酒のつまみを全部ピクニックシートの上にあけた。この湖畔のキャンプ場で一泊することもおもしろかったが、まだ日没までかなり時間があり、ここには温泉はないようだったし、またお土産店はあったが食料品店がなかったので野営の場所としてはふさわしくなかった。ぼくは地図を見て、海岸沿いにある白老温泉まで行くことを提案し、二人の賛成を得た。

ぼくらはそうめんを食った。ほかほかのじゃがいもを食った。鮭を干したものも食った。その他諸々のものをたらふく食ったら満腹になって、クッタラ湖からの下りは爽快だった。キタキツネの多い道だった。ぼくは余りにも心が浮き浮きしていたのであろう、いつのまにかこの湖からの下りで「クッタラホダラカホーイホイッ！」という叫びとも歌ともつかないエールを何度も繰り返して張り上げていた。適当に強弱をつけたのでアフリカの原住民の歌のような趣があった。他の所で歌うならたわけた歌だが、この時、この下りの心地よさの喜びをこれほど端的に歌った歌はなかったろう。クッタラホダラカホーイホイッ！この歌ほどこの谷間によくこだまする歌を沿道のキタキツネやクマたちは聞いたことがなかったろう。クッタラホダラカホーイホイッ！こうして下り切った時にはぼくの声はしわがれていた。こんな大きな声を出して歌ったのは久しぶりだった。

歌といえば、ジャックも支笏湖畔で野営したときに歌った。ぼくらはみな自分のテントに退き眠ろうとしていた。しかしジャックだけはいつものようにテントの中でまた酒を飲み始めていた。彼はそのときラジオでＮＨＫの放送をイヤフォンで聞いていたのだが、ある文部省唱歌が流れていた。上機嫌の彼はそれに合わせて歌ったのだ。しかしこれはあとでジャックから聞いてわかったことだ。テントの中で横になって寝ようとしていたぼくが聞いた歌声はどんなジャンルにも入りそうにないついぞ聞いたことのないものだった。かろうじて歌という分類には入るだろう。なぜなら歌の定義は「節をつけて発声される言葉」であり、ジャックは確かに節をつけていたのだ。さて、歌は一般にその言葉の発声法に基づいていろんなカテゴリーに分類される。しかしジャックの発声法は特殊で決して文部省唱歌のそれであるとは信じられないものだった。おそらく彼が言うように、イヤフォンを介して彼の耳に入るときにはだれもが知っている文部省唱歌の一つであったに違いない。また彼の耳が彼の脳に伝えた信号もその文部省唱歌が正しく信号変換されたものであったに違いない。しかし、アルコール濃度の上昇しつつある血液が循環する彼の脳はアルコールの過度の dipole momentの影響を受けてノイズを発生していたので脳波が乱れ、その信号を正しく処理できなかったのかも知れない。したがって彼の脳が彼の声帯機関に出した指令が多少歪められていた可能性が強い。次に、彼の声帯機関自体がアルコールに漬かっていたため、麻酔を受けた状態になっており、筋肉が引きつったり弛緩して、正しく機能し得なかったのかもしれない。いずれにしても彼の口から発声された節付きの言葉は、ぼくの耳に入るときには、文部省も一切の関与を否定するにちがいないものとなっていた。

後半: http://p.booklog.jp/book/116648/read